

社会思想の生い立ちと将来像* (Ⅱ)

大阪大学経済学部 内 海 洋 一**

第5章 マルクス主義の成立

1 マルクスおよびマルクス主義者

このように19世紀全体にわたっていろいろな種類の社会主義が現われてきた。それは近世初めのトーマス・モア、カムパネラなどと違って大んへ進んだのであった。しかし、19世紀に成立して今日なお非常に大きな影響力をもっている社会主義として、マルクス主義を見逃すことはできない。

マルクス主義は大体前世紀の中頃に完成している。だからこれはかなり古い理論である。マルクス主義はマルクスやエンゲルスによって形づくられたわけであるが、マルクスが生れたのは1818年、死んだのが1883年、エンゲルスは1820年に生れ、1895年に死んだ。マルクスが自分の考えをまとめて、それを要領よく書いたものに「共産党宣言」(1848年)がある。これは短い本であるが、この中にマルクスの全思想が圧縮されて入っている。決して難しい文章ではない。この「共産党宣言」があらわれたのは1848年である。これは日本ではペリリの黒船が来るよりも5年も前のことである。マルクス主義は最新のもっとも進歩した学説であると思っている人がいるが実は江戸時代末期に出ているわけである。それから、マルクスの書物として最もまとまったものに資本論がある。その第一巻があらわれたのが1867年である。日本では明治維新の前年、慶応3年、つまりまだまげを結って袴を着ていた頃であって、随分古いことである。それ以後、西洋においてはいろいろな社会学者や経済学者が現われて様々な学説を展開してきている。だから経済学説あるいは社会学説としてはマルクスのものは相当古いものである。そういうわけで先進諸国のヨーロッパやアメリカでは、労働者や労働組合もマルクス主義を卒業しつつありますが、日本では特別マルクス主義が盛んである。

共産主義陣営ではない国において、マルクス主義が最も盛んなのは日本であるといわれている。マルクスの墓がロンドンにあるが、この墓に一よく参るのがソ連人で、つぎが日本人だということである。お膝もとのイギリス

人などは殆んど来ない。とにかく日本では異常にマルクス主義が盛んである。先進国では衰えてしまったものが大変流行しているのである。経済学者の中でもそうである。経済学者の中で戦後の時期にはマルクス経済学者が7割を占めていたのである。最近だんだん減ってきて5割を割り、4割というようになってきているが一時は非常にマルクス主義の経済学者が多かったのである。今でも外国から経済学者が来ると日本という国は何とマルクス経済学者が多いところだろうと驚くのである。そういう点からしても日本においては非常にマルクス主義が盛んであるということがわかるわけである。決してマルクス主義は新しいものでもなんでもない。いまから100年も前の理論がどうしてこんなに盛んであるかということ日本においては戦前、戦時中10年ないし15年程の間、マルクス主義はまったく弾圧されてしまっていた。マルクスの本を持っているだけでも逮捕されるのである。筆者も警察へ連行されたことがある。それだけではなく赤い表紙の本を持っているだけでも逮捕されたという話もある。こういう時代が10～15年続いたわけである。それが、戦争に負けた途端に言論は自由だからマルクス主義を勉強してもよいということになったのである。そこで、敗戦直後、マルクス主義の書物が多く出版されて、大学教授も小学校の先生も、労働組合の指導者も、誰れもかれもマルクス主義にとびついたわけである。昨日まで忠孝一本を説いていた小学校の先生がきょうから何を言ったらよいだろうかととまどって何かそれに代る理論を求めていたときに、マルクス主義がどっと出てきたものであるからそれにとびついていったわけである。それから労働組合の指導者たちも、何か理論を持たなくてはならない、一体われわれに役立つ理論は何であろうかというように考えているときにマルクス主義が現われてきた。これこそ労働者の味方の経済学だというのでそれにとびついていったわけである。

そのように戦時中弾圧されていたが故にかえって日本ではマルクス主義が非常に盛んになったのであるがそれを正常だと思ったら間違いである。世界を旅行することの一つの利益は、日本では正常だと思われることが実は正常でないのだという点がわかることである。マル

* 本論文は一般人に対する講演に加筆訂正したものである。

** 経済学部長、経済学博士

クス主義が日本で盛んなのが異常であることも外国に行くときよく分る。われわれの身近にも、マルクス主義の知識を持っている人もいてしばしば質問されることもあるが、まずよく知っておかなければならないことは、マルクス主義というのはまげと袴の時代の学問であるということである。この時代の医学といえば盲腸炎にかかったらセンブリを呑んだり、胃ガンにかかったらゲンノショウコを呑んだりしていた頃である。現在そういう医学で病気をなおそうとするような人はどこにもいない。

ところが経済学は医学ほどはっきり効果が見えないので、そういう時代の古い経済学を最も新しいようにそのままふりまわしている人間が残っているのである。不勉強な学者の中にもいるわけである。しかし最近では変わってきている。経済学者の中でマルクス経済学者は7割もいたが現在ではかなり減って5割、4割という線に近づいている。また労働組合は15年前くらいまではマルクス主義理論1本でやっていただけたけれども、しかしこの数年の間に、全労、総同盟、新産別などはことごとくマルクス主義から脱してきた。又、総評の中の民間企業労働組合もマルクス主義を脱しつつある。恐らく最後に残るのは総評の中の官公労ではないかと思われる。つまり、妙なことであるが、マルクス主義は最後に役人の労働組合の世界に残るのはなかろうかと思われる。しかしそれも長くても10年の寿命ではなかろうかと推察される。それにしても戦後の日本では非常にはやって現在なお大きな影響力をもっているのがマルクス主義についてよく知っておく必要がある。

2. マルクス主義の成立過程

マルクス主義学説というのは何ととっても膨大な学説であっていろいろな学問を総合して成立したものである。第1に、ドイツの哲学者ヘーゲルから弁証法を学んだ。またイギリスのロバート・オウエン、フランスのシャルル・フーリエというような空想社会主義者からも大きな影響を受けている。ダーウィンの進化論の影響も受けている。さらに、フランスの唯物論者であるエルベシウスとかドルバックの影響も受けている。これらを総合してマルクスが中心になり、エンゲルスがそれを助けて前世紀の中頃にマルクス理論がほぼでき上がったのである。それをロシアではレーニン（ロシア、1870—1924年）が受けついで展開し、その後スターリン（ロシア、1879—1953年）が引きついできた。また、ドイツではカウツキー（ドイツ、1854—1938年）、リープクネヒト（ドイツ、1871—1919年）というような人々がマルクス主義を受けつぎそれを発展させたわけである。

3. マルクス主義学説の構成

マルクス主義の学説は、つぎの4つの部分からできて

いる。第1は哲学的な基礎、これが唯物弁証法である。

第2に、歴史が発展するにつれて社会は色々と変化し、終に共産主義になっていくのだということを説明する歴史理論である。すなわち唯物史観。

第3は、いわゆるマルクス経済学であって、これによって資本主義が崩れて共産主義になっていくことをより詳しく説明する。このマルクス経済学の基礎には労働価値説という特殊の価値理論がある。そしてそれに基づいて資本主義没落論を展開していくわけである。

第4に、政治上の理論として資本主義から共産主義へ移っていく過程においては、プロレタリア独裁が必要であるというプロレタリア独裁論あるいは資本主義最後の段階においては帝国主義があらわれてくるといった帝国主義の理論などがあるが政治論は全体としてよくまとまっているわけではない。

第6章 唯物弁証法

唯物弁証法あるいは弁証法的唯物論について簡単に述べよう。

世の中の本体は一体精神であろうか、あるいは物質であろうかということが長い間の哲学上の争いの中心であった。神とか精神とかいったようなもの、これが本体であって、それが形をとってあらわれたものが物質に過ぎない。あくまでも本体は精神であり、霊魂であるという考え方を唯心論とか観念論とかいうわけである。それに反して、本体は何とんでも物質であって精神は物質の1つの働きに過ぎない。人間の身体の中で最も高級なところは頭脳であるが、この頭脳の働きが精神にすぎない。こういうわけで宇宙の本体は物質であるというのが唯物論の立場である。ところで、物質は動かないで静止しているわけではなく絶えず運動発展していく。たとえば、地球を見ても大昔は宇宙塵の状態であったものが固ってくる。内部に圧力がかかって、どろ状の熱い鉱物となり、それが噴火して表面に出てくる。しかし、表面から徐々に冷えてきて現在の地球になったというように変ってきている。あるいは生物の進化を見ても大昔のアミーバ、細菌などが次第に発展してヒトデミたいなものになり、あるいは爬虫類になり、ねこや犬のたぐいになり、人間になってきたというように変ってきている。物質は絶えず運動し変化している。運動し変化するには一定の法則があるに違いないと考え、その運動変化の法則をマルクス主義の立場から明らかにするのが弁証法である。

弁証法というのは、元来ギリシャでは対話の技術という意味であった。会話をしている場合に、ある意見があると、つぎに反対の意見が出る。そうすると今度は2つの意見を総合した意見がでるというように議論が発展し

ていく。これが弁証法の大もとなのである。

人間の考え方もこういうように、1つの考え方があれば（これを正とする）やがてその反対のもの（これを反とする）があらわれてくる。さらにその両者の総合として第3のもの（これを合とする）がでてくる。するとまたその反対のものがあらわれてくる。このような発展過程ををとのである。絶対理念または世界精神というものもこのように発展する。これがヘーゲルが考え出した観念弁証法である。

これをマルクスが取り上げて、世の中の本体は物質であるが、物質の運動はこのように弁証法的に発展していくものであるとして弁証法と唯物論を結びつけたのである。弁証法というのは物質界の発展の一般法則であるということになるわけである。

この発展の法則をわかり易く箇条書にすると、

1. 対立物の争いと統一こそ発展の原動力である

一切のものが発展するには対立があるからである。対立物が相互に争ってそこにやがて統一物ができる。するとまた、必ずそれに反対するものがでて相互に争う。対立物の争いと統一を繰り返しながらものは発展していくのである。対立こそは社会現象のみならず、自然現象についても発展の原動力である。たとえば、歴史をとって考えてもこれまで歴史は階級対立によって発展してきた。奴隷制時代には奴隷と奴隷主が対立して闘争を繰り返すことによって社会が発展してきた。封建時代になると、国王や領主と農民、または農奴らが相争いながら社会を発展させてきた。またそれが統一されて市民社会を形成するわけであるがそれはまたブルジョアとプロレタリアに分れて対立する。その対立によって資本主義が次第に発展して共産主義に進んでいく。このように対立物の争いと統一を繰り返しながら一切の物事は発展していくのである。

2. 量的発展は質的転換を呼びおこす

ものが発展する場合には、ダーウィンが考えたように漸進的に発展するのではなくて、屈折をとめないながらジグザグ状に発展していくのである。ジグザグ状に発展していくというのは、量的な発展が質的な転換を引き起すからである。

エンゲルスは次のような例をあげている。水を徐々に温めていくと水の温度は50度60度と上っていくが、これは単に量的な変化にすぎないわけである。ところが水の温度が上って100度という点にくるとや否や、水は質的な転換を引き起して水蒸気になる。あるいはまた、錢でもポケットの中に次第にたまと最初のうちには200円、500円、1000円と量的に小遣いがたまっていくに過ぎないわけであるが、50,000円とまとめてくると、それを貯金や、

貸付信託にするというように投資する。単なる貨幣というものが質的転換を遂げて資本になるわけである。このようにして、量的発展があるところまで進むと俄然質的転換をとげていくのが一般的だというのである。社会の進歩もこのようにして行われるわけである。封建制度の世の中で生産力が進んで、もはやその枠内ではそれ以上に生産力が進み得ないという限界までくると、封建制度が破れて資本主義制度に変わっていくのであり、革命的な質的な転換が行われるというのである。資本主義も同様で、生産力がそれ以上進み得ない点までくると質的な転換が起り、資本主義は破れ去って社会主義社会が現われてくるのである。このように量の発展が質的転換を起しながら一切の発展は行われるというわけである。

3. 否定の否定の法則

これは、あるものAを否定する。そうするとAでないBがあらわれる。次にBを否定すると、またAに似たA'があらわれる。否定したものをもう一度否定しながら、すべてのものは発展していくという理論である。エンゲルスは次のような例をあげている。小麦の種に水分と温度を与えると種は否定されて麦の草になる。つぎには次第に草が枯れてやがてあとには麦の粒が残る。このように麦の種が否定されて麦の草になり、さらに発展が続くと草が否定されて種が残ってくる。しかもこの麦の種は前よりも数量が多く、前の麦よりは多少進歩した麦であるわけである。こういう具合に否定を否定して、より高度な形で前のものがもう一度あらわれてくると、このようにいうのである。この否定の否定をつくり返しながら発展は進んでいくというわけである。

このような一般法則に照らすと後で述べる原始共産主義の否定として階級社会が現われ、その否定として共産主義がくることは確実であるし、そのために階級闘争つまり対立物の闘争を行わなければならないことも明瞭であると考えられるのである。

では、唯物弁証法のどこが間違っているかを述べよう。唯物論について深く立ち入る余白がないので略するが唯物論と結びついた弁証法の間違っている点を主として取りあげることにする。

第1に、なるほど対立物の争いと統一を繰り返すことによって、ものが進んでいるように見える場面もあるが、法則という以上は普遍妥当性を持っていなければならないのである。一切の事物が対立物の争いと統一とを繰り返しながら進んでいるかというとかかなり怪しい場合がいろいろ出てくる。例えば、宇宙塵の状態から原始的な地球になり今日に至るまで地球は非常に進化している。この地球の進化は何の対立によって進んだかというとか甚だはっきりしないわけである。あるいは生物進化について考

えてみても、アミーバから人間まで生物は進化してきているわけであるがこの進化は何と何の対立によって進んだのか、その対立物ははっきりするわけではない。そしてまた、対立があると必ず発展するかと決めてそうではないわけである。例えば、エンゲルスは数学上の対立として、マイナスとプラスがあると知っているが、マイナスとプラスが対立すれば自ら数が発展していくかという決めてそうではなく、対立があっても発展はないわけである。このように対立があれば必ず発展があり、発展があるところには必ず原因として対立が存在するということは、われわれ日常の例について考えてみても、認めることはできないのである。それからまた、量の発展の質への転換、これももっともらしく思えるときもあるが先ほどの例についてみてもおかしいのである。

水を温めて100度になると俄然水蒸気になる。それを見ると、なるほど量の発展は質的転換を遂げるのだという元気がするが、ご承知のように水は水素(H)2つと、酸素(O)1つからできているが、その水の本体、 H_2O は湯であろうと水蒸気であろうと変わっていない。それは連続したまま少しも変わっていない。要するにエンゲルスは自分の理論を説くのに都合のいい突然変化したようにみえる場合だけ引き出してきているわけである。量の発展が質的転換を起して進むということは一般法則としては認められないのである。これにあてはまるような気がする場合もあるがあてはまらない場合も極めて多いわけであるか普遍妥当性を持つことはできないのである。

さらに否定の否定の法則も、いかにも巧妙な理論のような感じがするがそれでは水を否定して水蒸気になったから水蒸気をもっと熱していたら水に似たものになってくるかというとならぬ。これも一般法則と認めることはできないわけである。

しかるに、このような唯物弁証法を一般法則らしくマルクス主義者たちが説いているのは何故かという、これを一般法則だと思いこませておく共産主義の説明するのに非常に便利だからである。

まず対立物の争いと統一によって社会のみならず自然も進んでいくということを主張すれば階級闘争を大いにやらなければならないことになる。資本家と労働者が対立物として大いに争ってこそ資本主義は克服されて共産主義に向うということを説明するのに都合がよいわけである。また量の発展の質的転換もこうである。つまり漸進的のものは発展していくのだといえば社会は改良を積み重ねていけばよいという結論になって具合が悪いのである。しかし、マルクスのように量の発展が俄然質的転換を起して発展するという理論をもってすれば、資本主義社会が発展して限度にきたとき革命が起きて、俄然社

会主義社会に変化するのだというわけで、急激な革命的变化を説明するには非常に便利である。

また否定の否定の法則も昔の原始共産制が否定されて奴隷制とか封建制とか資本主義社会などが出現し、その後、資本主義末期にこの階級社会が否定され、より高度な形の共産主義になって行くのであると説明するのに便利である。否定されたものをもう一度否定するという一般理論を基本にもっておれば共産主義が非常に説明しやすいのである。

結局、唯物弁証法の基礎理論は科学的にみれば一般法則として認めることが出来ないものである。ただこのような理論をふりかざしておれば共産主義の到来を説明するのに非常に便利であるため、この理論が一般にあてはまる普遍妥当性をもった理論であるかのごとくマルクス主義者はふれ廻しているにすぎないという批判が成立するわけである。

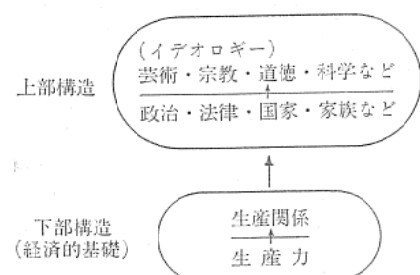
第7章 唯物史観

この学説の中から重要な点のみを抜いて説明しよう。まず唯物史観は社会生活全体を分析し、上部構造と下部構造とに分ける。下部構造をなしているものは、経済的基礎である。マルクスは社会生活・人間生活の根底にあるものは経済であると考えていたわけである。

そして第2図に示すように下部構造が更に二重の仕組みを持ち、その1階つまり下部が生産力、その二階つまり上部が生産関係である。生産力は一番重要な歴史の原動力である。そして二階にあるのが生産関係である。生産関係というのは、生産をする場合に人間1人で生産するのではなく、多勢の人間が相互に関係しながら生産しているわけである。鉄をつくる会社もあれば繊維をつくる会社もあるというように分業が行なわれ、また、それらの会社が協力もしている。あるいは管理者もあれば技術者もあるし、現場で直接に仕事にたずさわっている人もある。そういういろいろな生産において人間は一定の人間関係に入るわけである。生産において人々が相互に入り込む関係が生産関係である。

上部構造もまた二重になっていて、その下部が政治・法

第2図



律・国家など社会制度的なもので、その上部が芸術・宗教・道徳・科学など観念文化いわゆるイデオロギーである。下部が基礎になり上部を決定する。図の矢印がそれを示している。

さて、歴史はどのように動いているかという、歴史を動かす原動力は下部構造である。殊に下部構造の下部構造である生産力は、自ら後に続くものをつくっていく力を持っている。生産力が自らの力によって盛んに発展していくわけである。生産力が発展していくことによって、生産関係も動かされ、下部構造全体が変化する。そして、下部構造が絶えず上部構造を決定しているのだから、下部構造が変れば上部構造もそれにつれて変わっていくわけである。

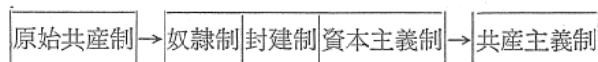
下部構造は、政治や法律を規定していく、そしてこれがまた芸術や科学を規定する。このようになり、下部のものが上部のものを決定するという関係をもっているわけである。したがって下部が動いていけば、下部の上に乗っている上部構造全体が急激に変化するか、あるいはおもむろに変化するか、いずれにしても、次第に上部構造が変わっていくのである。これが歴史の変化の根本原則であるというわけである。

余談ではあるが、唯物史観の場合の唯物的というのは経済的ということの意味する。日本でも物質というときは石・砂・空気・水などを指す場合がある。別に、あの人は物質的にめぐまれている、あの人は物欲が強い人だ、というように経済的ということを指す場合がある。唯物弁証法の唯物的はどちらかという、物理的な意味での物質的ということを指す。空気や水や石のような物質——精神に対立するもの——を意味する。これに対し、唯物史観という場合の唯物的は、むしろ経済的という意味する。大学の先生の中でも、唯物的ということのこの2つの意味が区別できない人が沢山いる。ともあれ、この経済的な基礎が社会を動かしていくと主張するのだから、このような社会の見方のことを唯物史観というのである。

さて、もう少し説明を進めよう。マルクスの「哲学の貧困」の中の言葉を借りるならば、手ひき臼を用いるような生産力の段階では封建君主の支配する社会が成立し、蒸気粉ひき機を用いるような生産力の上には、産業資本家の支配する社会が現れるというわけである。生産力が手ひき臼程度のときには、それは封建君主が存在する封建社会を作るのであるがもう1つ付け加えるならばそういう生産力、そういう社会においては文化現象も封建的になる。例えば、日本でいえば歌舞伎、能、狂言などの封建的芸術が現われてくるわけである。その生産力が進歩して蒸気粉ひき機になってくると、社会も産業資本家

の社会になり、芸術の分野においても新国劇などのような新しいものがそれに相応して出てくるのである。要するに手ひき臼から蒸気粉ひき機へと生産力が進むと下部構造が上部構造を決定しているわけであるから、それに応じて上部構造全体が変わっていく、このようにして歴史は進んでいくというわけである。今一度述べると、封建的な生産関係の中で、もはやそれ以上生産力が発展できない限界までくると生産関係がまた変る。そうすると結局、下部構造全体が変るわけである。下部構造全体が変わればそれに応じて、国家や法律などの社会体制が変わってくる。またそれに応じて科学や芸術、宗教、道徳なども変わってくる。封建時代にはカトリックが中心であった。やがて、産業資本家が現われてくるときには宗教の分野においてもプロテスタンチズムが現われてくる。こうように歴史は進んでいくのである。これが唯物史観の根本原理である。

ではこのような原理にもとずきながら歴史はどのような順序で発展して行くのかという、次図のようになると主張するのである。



無階級社会

階級社会

無階級社会

一番昔には原始共産制という社会があった。丁度ジャングルの土人部落の映画で見られるように皆で平等に働き平等に消費する社会である。この時代は生産力の非常に低い時代であった。その原始共産制がくずれると奴隷制の時代になる。ギリシャ・ローマの社会がそれであった。原始共産制の時代は部落同士が争って勝っても捕虜は全部殺されてしまう。それは生産力が低いために奴隷を捕虜にしてもその奴隷が自分の食べるもの以上に生産できず少しも役に立たないからである。だからせいぜいその骸骨を自分の部屋に飾って手柄を示したりするだけである。しかし、もう少し生産力が上がってくると奴隷が働いて自分が生きるための食べ物以上になお余分のものが生産できるようになる。そこで奴隷主はその余分のものを搾取して働かずに食うことが出来る。したがって奴隷を使って生産するようになり奴隷制が出来上るのである。しかし、さらに生産力が上がってくると、今度は奴隷をいちいち畑へ連れて行ってムチで叩きながら使役するのは奴隷は積極的に働こうとしないため十分の能率が上らなくて不利である。それより一定の土地に拘束しておいて奴隷に自主的に生産させて年貢を徴発する方が有利である。奴隷は農奴あるいは領民になる。領民が勝手によそへ行かないように関所が設けられたりする。これが封建制度である。

さらに生産力が進むと、そのように領民を畑に縛りつ

けておいてその生産物の中から上まえをはねるというのは、いろいろ都合の悪いことが出てくるわけである。機械生産あるいは工場生産が行われ分業もますます進んでくると領土が狭く封鎖されていては具合が悪い。一箇所で大量に物が生産されるが狭い領土の中ではそれがさばき切れない。したがって分業を大いに進め工場で大量生産をしていくためには市場を拡大しなければならない。封建的なワク組みを潰して全国的に商品が流通するようにしなければならないわけである。

それからまた、封建制度においては、国王と家臣、領主と百姓、あるいは武士と農民という主従関係が中心になっているのであるが、しかしこれでは近代的な工場生産にさしつかえる。生産が拡張する場合にはたくさんの労働者を雇う必要があり、主従関係でなると雇傭関係にならなければならないわけである。それから、不景気になると雇傭関係であれば解雇することができるわけであるが主従関係のもとではそうはいかない。こうして、自由契約にもとづく資本家と労働者の関係ができ上がってくるのである。このようにして生産力が進んでくるとそこに資本主義体制ができ上がってくる。さらに資本主義制度が進むと工場の中においては生産が非常に社会的に行われるようになる。一つの工場の中に何千名、何万名という人々がいてそれぞれの人が非常に計画的に配置される。ここで何々を作っている、つぎの場所ではそれを加工する。またそのつぎの場所では塗装をする、というふうに計画が立てられて生産が集团的社会的に行われる。いわば生産の社会化が進むわけである。この生産の社会化と個人的な所有とが矛盾するようになってくる。生産は社会的に行われているのに所有は個人的である。大きな工場を個人が持っている。社会的な生産——資本主義初期のように個人的な生産ならよいが社会的な生産が行われているのに個人的な所有が支配しているということでは、両者の間の調和が保たれない。そういうわけで資本主義の制度は破れて社会主義を経て共産主義になっていくと考えるのである。唯物史観の重要な一側面として、こういう経済発展段階説があるのである。一番最初は原始共産制である。原始共産制は無階級社会である。それから奴隷制、封建制、資本主義制という階級社会がくる。共産制は、また無階級社会である。

そうすると、先程述べた「否定の否定の法則」というのがあてはまってうまく説明されるわけである。昔、原始共産制があった、それが否定されて階級社会が現われてきた。階級社会をもう一度否定して共産主義社会が現れる。こういう順序を辿って社会はどんどん発展していくのだというように説明するわけである。

こういう基礎理論によって、共産主義がやがて現れて

くる、と説明するのがマルクスの歴史論、つまり唯物史観である。

それでは、この唯物史観のどこが間違っているだろうか。簡単に述べると、第一番目に唯物史観では、下部構造の下部構造である生産力が発展して、それが一切の他のもの、社会体制、芸術、科学などをひきいてゆくというのである。物的生産力が社会を動かすから唯物史観といい得るわけである。ところが、生産力が社会を動かすという以上は生産力は自ら運動をする必要がある。つまり、生産力が自己運動をするということを認めない以上は唯物史観は成立しないわけである。

そこで、生産力が果して自己運動をするのであろうかということを考えてみよう。

結果をのべると、生産力というのは決して自己運動をしない。手挽き臼を小屋の中に放っておくとひとりでもそれが蒸気粉挽き機になっているし、蒸気粉挽きが工場の中で知らない間に電気粉挽き機に変っているというようなことは決してない。手挽き臼は小屋の中は転がしておいたらいつまでも手ひき臼のままに止まっている。生産力が進むのは何によっているかということ、それは主として科学や知識によっている。科学や知識、これがいろいろな技術を生みだして生産力を推し進めていくわけである。そう考えると、科学、知識こそ社会を動かす原動力でないかという考え方がここに浮び上がってくるわけである。だからいまアメリカにいるエドワード・ハイマンという学者は次のように述べている。「唯物史観は紙一重で完全な唯心史観に転化する。」物質的な生産力こそ社会の原動力であるというが、その生産力を動かすのは科学とか知識ではないか。そうでなければ唯物史観は、たちまち唯心史観になってくるというわけである。

このような具合に、生産力が自己運動をするという点を認めることはできないのである。そうすると唯物史観が根本から崩れてくるのである。要するに、社会の発展は何によっているかと言うと、生産力だけが唯一の発展の原動力であるとはいえないのである。同様に、科学だけが唯一の歴史を動かす原動力であるという考え方も、今日では認められないのである。結局、科学や生産力や政治などが相互作用を行いながら歴史は進んでいるのである。政治家が科学教育を促進するなら科学は進む。科学が進むとその知識を応用して生産力が非常にひき上がってくる。生産力が進むと、また学校教育や実験設備が整い、そのためにまた科学はますます進む、というように科学や生産力やあるいは政治といったものがお互いに作用を及ぼしあいながら歴史を進ませているのである。

生産力だけが唯一の歴史を動かす原動力であるという考え方は非常に一元論的であるといわなければならない。

上に述べたように色々な要素が相互作用を行いながら進んでいくのである以上、どれが上でありどれが下であるということは決していえないのである。相互に作用し合う以上は、同一平面において科学も生産力も政治も考えなければならない。上下の関係を設けて一番下にある生産力が歴史を動かす唯一のものであるという考え方は、今日では古いわけである。なぜ古いのかというと、このように一つの要素だけをとりえて、それで一切を説明しようという考え方を一元論という。一元論的な考え方は中世的な考え方である。中世は、神が万能の時代だったのである。だから、中世においては何が起きても、例えば新潟の大地震のようなものが起きても、あるいは、どこかのガス貯蔵庫が爆発しても、あれは全て神のみわざであり、神のおぼしめしであるというように、何でも神で説明した。神さえもってくれば一切の説明がついたわけである。神によって一元的に説明をしていたのである。そのうち、神だけで説明するのでは科学的でなく、具合が悪いというようになった。そこで、もう少し神をほかして、マルクスの先輩のヘーゲルになると、絶対精神というものを使ったのである。宇宙には宇宙の本体をなす絶対理念、または世界精神というものがある。その絶対理念が次第に自己発展して物質界となり、生物界となり更に人類の世界に展開し、精神界にまで進んだのである、というのである。科学がもっと進み、科学的な考え方が普及すると、この絶対精神も神がかっていて具合が悪いということになってきた。そこで、マルクスが原動力としての生産力をここにもってきたのである。その意味でマルクスは、科学の時代に合うように一元論的な歴史の考え方を作り直したわけである。それにもかかわらず一元的な思考法それ自体は、依然として残っている。そういうわけで、マルクスの唯物史観は、多分に中世的であるということがいえるのである。中世的な考え方が、尾鰭骨のごとくマルクスの考え方の中に残っているということができるのである。

以上、生産力の自己運動という点を中心に批判してきたが、つぎに下部構造が変ってくると上部構造がそれに応じて変っていくかということを取り上げると、必ずしもそうはなっていないのである。これについては、諸説があるが、具体的な例をあげると、たとえばジャズは、もともと原始的な土人部落に始まった音楽である。石器時代程度の、生産力の非常に低いところで、ジャズが生じたわけである。唯物史観からすると、そういうジャズという石器時代生産力に相応する音楽は、高度に進んだ資本主義社会、社会主義社会では流行らないはずである。しかるに生産力がもっと進んだ資本主義のもとにおいてジャズは非常によく流行っている。ソ連でも、フルシ

チョフが言論の自由を少し緩めるとそこにまたジャズが流行って来たのである。そういう点からしても下部構造が変っても上部構造に同じものが現われてくるということがいえるのである。下部構造の変化につれて、ほう大なる上部構造はそれに応じて変っていくということは必ずしもいえないわけである。

あるいはまた、たとえばアメリカとソ連とを比較すると、生産力の面でソ連のほうがまだ大分劣っているが、トラクターを用い機械を動かして生産するという点においても大雑把にみると生産力の性質は相似通っている。それならば似通った社会体制ができ上りそうであるが、一つはソ連的な共産主義、一つは資本主義というように、あまりにも異なったものが上部に生じてきている。

このように、実際の例についてみても、下部構造が変れば上部構造はそれに応じて変ってくるということは、必ずしもあてはまらないわけである。これについて、もう少し理論的な説明をすると、フランスにガブリエル・タルドという社会学者がいて、次のようなことを述べている。世の中の現象には非可逆的直線的に進むものと、同じものが何度も繰り返されながら出てくるものと二種類ある。真直に直線的に進むものとは、科学、技術、生産力というものである。このようなものは昔から今日に至るまで一直線に進んできており、ひとたび蒸気粉挽機を発明した以上は、再び石器時代の臼にかえるということはないわけである。一度、電灯を発明した以上は、また油を使うあんどんにかえるということはない。すべて直線的に前へ前へと進むわけである。科学、技術というものはみなそのような性質を持っている。しかし、情緒的なもの、たとえば流行などは以前に一度出てきたものが、また改めて出てくるようになる。何度も繰り返しているわけである。たとえばバラソルの柄やスカートの長さをとってみると、生産力の発展につれてどんどん長くなる一方かということではなくて、長くなったり、短くなったりしている。あるいは、着物の柄などもそうである。矢絰とか市松模様などというものは、ある時期に流行ってやがて衰える。また暫らくすると流行するという具合に何べんでも同じものが繰り返して現われてきているわけである。科学、技術、生産力は直線的に進むが、文化などにはこうして繰り返すものがある。そうすると異った生産力のもとにおいて、同じAならAという文化が現われてくるということが理論的にも認められ得るわけである。同じ水着、同じスカートが共産主義体制のもとでも資本主義体制、封建主義体制のもとでも現われることがある。そうすると、下部構造が変っても上部構造は変わらないことがあり得るのであって、唯物史観の通りにはならないわけである。だから下部構造が変れば文化

一切に至るまでことごとく上部構造が変っていくのだという理論は、このタルドの理論からも否定され得るわけである。つぎに、唯物史観の主張する経済発展段階説が果して正しいかどうかについて述べよう。

たとえば、原始共産制というのがほんとうにあったかどうかということにしても非常に疑問がある。モルガンという社会学者が19世紀にあちこちの土人部落を調べまわって原始共産制があると述べている。エンゲルスは喜んでそれに飛びついていった。しかしその後、たとえばマリノフスキーなどという学者が出て、原始共産制があったかどうかかわからないという批評をするようになってきたのである。そして、その他の多くの人々が原始共産制というようなものはなかったのだという結論を出したのである。マルクス主義者が原始共産制を主張する背景には、つぎのようなことがある。キリスト教の説教の中に、昔、楽しいパラダイスがあった。そしてアダムとイヴがリンゴの実を食べてから楽園が失われたという話がある。そういう考えが知らず知らずのうちにマルクスやエンゲルスの中にしみこんで、大昔には原始共産制という程度は低いけれどもたのしい共産制があった、という考え方を生みだすのに影響を与えている。しかし、今述べたように、実証的な研究にしたがえば原始共産制というものはなかったという考え方が社会学者の例に有力になってきている。さらに最近では次のようなこともいわれている。原始的な人間が共産主義的な暮らしをしたものなら、それと相近いサル社会においては共産主義が行われていなければならない筈だ。ところで最近サルの社会の研究が非常に進んだがサルの社会は決して共産主義ではないことが解った。表面を見ると、どれもこれも着物は着ていないし尻は赤いし絶対平等の共産主義の暮らしをしているように見える。しかし、ことに日本ザルの動物社会学的研究によれば決して平等な共産主義の暮らしをしているのではないのである。サルの社会は餌をやると、ボスザルがまず一番美味しいところを全部取ってしまう。ボスザルが食べ終るまで外の弱いサルどもは、じっと待っているわけである。ボスザルが済むと、こんどはボスザルのつぎの小ボスがおもむろに餌をとりに行くのである。小ボスのつぎにさらにまた、小ボスというのが餌をとる。こういう風にして、原始共産制よりももっと低いサルの社会にさえ、こういう階級制がある。そうだとすればまったく平等な原始共産制というものは甚だあやしいのではないかと最近ますますいわれるようになってきたのである。その外に、次のような批評もある。昔の原始共産制は、部分的な小社会にはあったかもしれない。しかしながら、大社会と小社会というものは違うのだ。小社会をとって考えた場合、昔、森の中に20人、30人の

一つの大家族をなす人間が住んでいて、共産主義的に暮らしていたということはある得るだろう。しかし、家族のような小社会をとって考えると現在でも共産社会は存在するといえる。我々の家庭の中は一種の共産主義である。取ってきた月給で、家族みんな同じおかずで同じ飯を食べて、必要に応じて石けんやチリ紙を使う。そして病気をした者には働かなくてもたくさん薬を買って与えるようにしている。

これと同じように、昔の社会においても、20人、30人の大家族のもとで共産主義が行われていたとしても不思議ではない。そういう小社会における共産主義を現在の日本全部やアメリカ全部のような大社会と直接比較することがそもそもの間違いではないだろうか。大社会は大社会相互に、小社会は小社会相互に比較すべきである。小社会である家族内共産主義ならば現代においてもあるという鋭い批評も行われている。

それから、奴隷制というのはギリシャ、ローマ時代にあったのは確かであるが、世界中のどこにもあり、原始共産制のつぎに奴隷制というものが必ず出てきたかというところも非常に怪しい。たとえば、日本に奴隷制があったかどうかという点になるとこれは非常に問題がある。日本の左翼の経済学者や歴史家は日本にも奴隷制があったということをしきりに説こうとしている。日本では弓削部とか物部といった「部」があったが、そういう「部民制」というのは一種の日本的な奴隷制であるということ、日本共産党の渡辺義通氏らが述べた。しかしながら、西欧的意味における奴隷制であつたということとなると、これも怪しい。15年ほど前の話になるが、日本の左翼の学者達が日本にも奴隷制があったということを一生涯懸命に強調していたときにソ連の歴史家が日本に来て、日本の左翼の学者の前で、平気で日本には奴隷制はなかったということを言ってしまったことがある。そういうわけで、ヨーロッパのギリシャ、ローマにおけるような奴隷制が世界のどこにもあったというのも非常に疑問が残るのである。

つぎの時代に封建制度があったことは確かである。ことにヨーロッパの封建制度および日本の封建制度というのは非常にはっきりしていた。マルクスは日本の江戸時代のことを聞き、ヨーロッパと非常によく似た封建的社会体制が日本にもあることを知って驚いた。そして、下手な著者の封建制度に関する研究を読むよりも日本の封建制度をぢかに見たほうがずっとよくわかるということ、を資本論の中に書いている。しかし、世界のどこでも奴隷制のつぎに必ず封建制度が来ていたかというところも極めて怪しいのである。たとえば支那のような国を例にとってみると、西洋や日本のような形のはっきりして封

建制度は現われていない。支那の漢代をみると、無理をして封建制度といえはいえないこともないが、しかし一種の中央集権的官僚制といった方が適切だという人もいる。それを封建制という粹に無理に当てはめようとすれば事実を曲げる恐れがあるとも考えられる。

あるいはまた資本主義が爛熟しきって共産主義に進むという点についてもきわめて問題多いわけではある、資本主義が最も進んだ米国、英国が共産主義になりつつあるかという、なりそうな気配はえみない。最も共産主義が発展したロシア、中国などの国は、資本主義が熟してきたかという決してそうではない。ロシアの革命が行われたときには資本主義がいくらか発展していたけれども、工場労働者は全有業人口の10%に足らなかったほどである。90%は小作人や自分で農業や手工業などをして自営業者であった。中共や北ベトナムなども同様である。このように唯物史観はいろいろな点で多くの欠陥があり、とても科学的な歴史理論とは言えないのである。

第8章 マルクス主義経済学説

1. 労働価値説と剰余価値説

マルクスの経済学の基礎には労働価値説という特有の価値理論がある。それは、まず現在の資本主義社会というものは、商品生産の社会であるというのである。つくるのではなくて販売するために物をつくっている社会である。昔の自給自足の時代には物を生産するといえば自分が使うために生産していた。自分でワラジを編んでそれを自分が履く。自分で味噌をつくってそれを味噌汁にして食べる。自分でミノをつくるのは自分が着るためである。みんな自分の使用のために自分がつくっていたわけであるが現在の社会においてはそれを他人に売って金を得るために商品を生産しているのである。このように売るための品物のことを商品というすれば、現在の資本主義社会は商品生産の社会であるといえるわけである。これはマルクスのいうとおりであると考えてよいだろう。

そこで現在の資本主義社会を分析するためには、商品を生産しなければならぬ。商品は資本主義社会の細胞であるとマルクスは述べているが、そういう細胞をはっきりさせなければならぬわけである。商品というのは、売買される品物のことであるから商品の性質を知るためには売買値段—価格というものを分析しなければならない。なぜキャラメルが1箱20円であり、卵が1個10円であるか、どうして卵の価格が上ったり下ったりするのであるか、このような値段を説明していかなければならない。値段を説明するためには価値の説明が必要である。このようにしてマルクスの価値論が展開されるわけであ

る。

ところで、すべての商品には、人間の役に立つという性質があるわけである。このような性質を使用価値というのである。そしてもうもうひとつ、商品には、この商品を出せばそれと交換に米1斗を入手することができるというような他の物を獲得する力がある。この他の物を獲得する力を交換価値というわけである。いっさいの商品には使用価値と交換価値があるわけである。交換価値が貨幣の形であらわれたものが価格であるといえるのである。

そこで、この交換価値はどのようにして定まるのかについて述べてみよう。例えば、マルクスのあげている例では、市場において1クォーターの小麦がaツェントネルの鉄と交換される。かりに、1クォーターの小麦が1万円としaツェントネルの鉄も1万円であれば、1クォーターの小麦とaツェントネルの鉄は等しいということになるわけである。実際はこのように直接の物々交換ではなく、貨幣を媒介として交換されるわけである。こうして小麦と鉄とが交換されるとすれば、そこに何らかの共通性がなければいけないわけである。

ところが商品である以上、小麦にも鉄にも使用価値があるわけであるが、使用価値の性質はそれぞれ違っている。小麦はパンになって人を満腹させるという使用価値を持っているし、鉄は鋏や鎌になって農業などの役に立つという使用価値を持っているが、人を満腹させるということと、鎌になって物を切るというのでは全然性質が違うわけだから使用価値は相互に比較することはできない。使用価値は、したがってあらゆる商品に共通する尺度ではあり得ない。交換価格の成立と直接に関係ないわけである。

しかし、あらゆる商品に共通な何らかの尺度がないと、どちらが高くどちらが低い、どれとどれが等しいというようなことはいえないわけである。だから共通の尺度を採さなければならない。ところで、あらゆる商品—小麦にも鉄にも、あるいは紙にも石炭にもスリッパにもシャツにも共通する尺度は何だろうか。このことをマルクスが考えぬいて、あらゆる商品に共通するのは、それが労働によって作られたという属性であるという結論に達した。労働こそはいっさいの商品に共通する尺度ではないだろうか、と考えたわけである。そうだとすれば、この労働の量あるいは労働の時間こそ品物の価値を決定するものであるに違いない。労働量を多く含むものは高く、労働量の少ないものは低く価値が決まるであろう。もう少し正確にいうと、「生産のために社会的に必要な労働時間」こそが品物の価値を決定するのである。つまり、カバンをつくるのに20時間を必要とする、時計をつくるのに

100時間を必要とするということがあつたとすれば、時計は100労働時間の価値を持ち、カバンは20労働時間の価値を持っている。従つて、時計とカバンとが1対5の割り合ひで交換される。そういう関係が成立するわけである、そのように、品物を生産するために社会的に必要な労働時間が価値の実質的内容をなすのである。社会的に必要なということは、時計をつくるのにも上手な人はこれを50時間でつくるし、下手な人はこれを200時間かけてつくるというような個人差があるわけである。そこで、社会的というのは社会的に平均的なという意味を持つ、その意味で社会的に必要な労働量こそが価値の実質的な内容をなすというわけである。また、その交換価値を貨幣で表わしたものが、これが価格である。価値を価格で表わというのは、たとえば、時計をつくるのに100時間かかったとする。ところで10時間かかって金をつくったらaグラムの金ができて、そのaグラムの金のかたりに印を押して、1000円というしるしをつける。これが貨幣である。つまり、10時間で生産した金に1000円という呼称が与えられる。1000円の実質的内容は10時間で生産された金である。そうすると今度は100時間かかって作った時計というものは金貨であらわせば10個になる。したがって時計の価格は10000円ということなるわけである。これがいわば、価値を貨幣的に表現するということである。(マルクスは、金本位制度のみを念頭において貨幣のことを考えていた。) このようにして、価値を貨幣的に表現したものが価格である。物の値段の背後にある価値というものはその品物を生産するのに社会的に必要な労働時間である。これが労働価値説である。

つぎにマルクスは労働価値説と共に剰余価値説——搾取の理論——を唱えている。

資本主義社会においてはすべての品物が商品として生産される。つまり、労働力の価格は労働力を再生産するのに社会的に必要な労働時間によって決まるわけである。労働力の再生産をするというのは、労働者が疲れて工場から帰ってくるとビールを飲んで、食事をして、ふとんの中で寝て、そして体力を回復するわけである。だから第1に食べたり寝たりすることによって、体力を回復するのが労働力の再生産である。第2にそのようにして自分自身の労働力を回復すると同時にまた自分が次第に老化して、労働力を失う頃には息子が大きくなって、自分の労働力の後継をするようになっていなければならないわけである。そこで、労働力の再生産ということは自分の労働力それ自身を毎日再生産するということと、自分が老化したときにあとを継ぎの労働力を作っておくということの両方を含んでいるわけである。結局、労働力の再生産といへば、自分及び家族の一定の生活を維持する

ということに帰着するのである、さらにつきつめて言うと、自分と家族の生活を維持するためには味噌とか、米とか、衣類とかあるいは電灯とかいうものが要る。ところで1日に使用する味噌、米、衣類、電灯といったような諸々のものを生産するの何時間の労働が要るだろうか。これらを生産するに6時間かかるということであれば、労働力の価値は6時間に決まる。このようになるわけである。この場合1時間の労働を100円であらわすとすると、労働力を再生産するためには600円かかるわけである。このようにして、賃金というのは、結局は労働力の価値に落ちつくのである。いっさいの商品の価格がそれを生産するに必要な労働時間によって決まると同じように、労働力の価格である賃金も労働時間によって決まるというわけである。

ところで、この労働者の生活水準には、味噌、米、醬油だけを食べているか、あるいはチーズやバターや牛肉を食べているかなどと、いろいろのものが考えられる。そうだとすれば、労働力の再生産に必要な生活水準とは、マルクスによると、これは労働者がその時代時代の技術水準に応じて労働し得る最低の生活水準に落ちつく筈である。たとえば、ソロバンとかタイプなどそれぞれの時代の技術が要求する資格ないし技能をもち得る最低の生活水準に賃金は決まる筈である。賃金の決定も、他の商品の決定と同じように、それを再生産するに必要な社会的平均的労働時間によって決まるというわけである。そこでさき程の説明のとおり労働力を再生産するには、例えば600円あつたらいいというのであれば賃金は600円に定まることになるわけである。後述するが、マルクスによれば資本主義社会においては絶えず労働者はあり余って失業者はいつもいつもいるわけだから最低の生活水準を維持するに足る賃金さえ払えば労働者はいつでも集まるというわけである。

ところが、労働価値説の原則からするとこの600円を払って買った労働力を12時間働かすと12時間分の価値を生み出す。貨幣で表わすと1200円であるが、そこから賃金にあたるものを差し引けば600円だけの余剰が出てくる。これが剰余価値 m である。 $1200円 - 600円 = 600円$ 、マルクスの資本論の中の文句で表現すると、「労働者の1日の生活を維持するために6時間の労働が必要であるということは、その労働者を12時間使うことを何らさまたげるものではない。」そのようにして、600円さえ払えば労働力をいくらでも購入することができる。それを12時間働かししたら、労働価値説に基いて12時間分だけの価値、即ち1200円ができる。そこから600円を引いたら600円だけの剰余がでてくるわけである。これが剰余価値といわれるものである、この剰余価値を取ることが搾

取である。これがマルクス経済学のいう資本主義社会における搾取の仕組みの概略である。

2. 資本主義没落論

(1) 資本の有機構の高度化

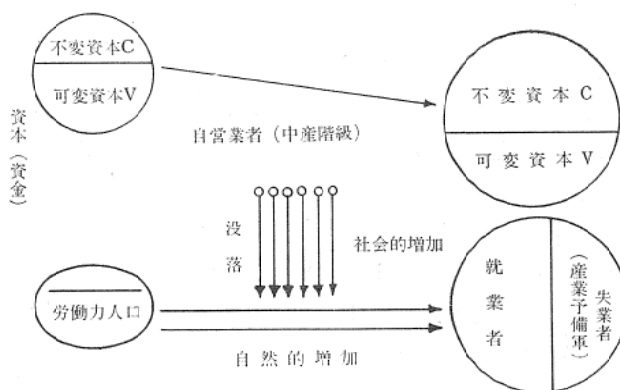
資本家が一定の金をもって、その資金をじっと貯えているだけでは利益は生まれてこない。その資金で労働力とか、あるいは電気とか、機械とか、原材料とかいろいろなものを買って新しい品物を生産しなければならない。資金のうち労働力の購入にあてる部分、つまり賃金の支払いにあてる部分をV（可変資本）で表わす。それから労働力以外に機械とか、電力とか原材料とかいうようなものを多く必要とする。労働力以外の生産要素の購入にあてる資金部分のことをCで表わす。つまり、労働力以外の生産要素を買うために用いられる資金を不変資本といい、Cはそれを表わしている。

なぜ労働力を買う資本を可変資本というかと言うと、先程も述べたように600円の値段で労働力を買ってきて、その労働力を働かすと1200円のもの生まれるというふうに価値の量が変わるからである。だから変わる価値の資本という意味で可変資本というのである。原材料などはそうではない。400円の原料を使っても、400円の原料は400円として生産物の価値の中にそのまま入っているに過ぎないのである。例えば、400円の原料と600円の労働力を買ってきて、それで生産をしたら1600円ものできたとしよう。この1000円の資金が1600円になったのはなぜであるかと言うと、原材料の価値はそのまま製品の方へ入っているだけで何ら価値は増えていない。ところが、労働力が使われた結果その価値が1200円に新たに増加しているわけである。このようにして1000円が1600円になるわけである。労働力に用いた資本の方は価値の大きさが変わるのだから可変資本というのである。

さて、物を生産するには機械や原料や電力などの生手産段と労働力を買わなければならない。ところで、資本主義が発展するにつれてどういう結果が生ずるかと言うと、資本は蓄積されるから次第に大きくなる。例えば松下電器の資本でも終戦後と現在とを比べると、何千倍か大きくなっている。日本全国の総資本をとって考えても終戦後に比べると現在では何百倍かに大きくなっている。そのようにして資本主義が発展するにつれて、資本が蓄積されてきているのである。ところで、単に資本が蓄積されるだけでその資本の中身におけるCとVとの割合は何ら変らないかと言うと、そうではなくて資本が蓄積されると共にCとVとの割合が変っていくのである。というのは、資本主義の発展過程において、資本家と資本家が非常に激しい競争をしながら生産を営み企業を運営する。したがって、その資本家たちは、他

の資本家より一歩でも早く新しい機械を使い新しい技術を導入して少しでもコストを切り下げて良い品物をつくってやろう、とする。その結果以前よりは機械を多く用いるようになってくるわけである。したがって第3図に示すように、資本が蓄積されるだけではなくて、資

第3図



本の内容のわけ方が違って来るわけである。昔は労働力をたくさん使ったが、徐々に技術が進みオートメ化が進むにつれて、労働力はあまり使わなくなってくる。そのかわり電力とか機械などが重要になってくるわけである。だからCとVとの割合が変っていく、というのである。このCとVの割合のことを資本の有機構成という。

この資本の有機構成を C/V (または $\frac{C}{C+V}$) あてらわす。これはマルクス経済学特有のことばである。

この資本の有機構成の高度化の背後には資本の技術的構成の高度化がある。技術が進めば1人当りに鉄とか電力をますます多く使うようになってくる。このようなのが資本の技術的構成の高度化である。そうすると結局資本のうちで鉄などの購入に当てる部分と、賃金の支払いに当てる部分との比である資本の有機構成で高度化してくる。そのように C/V すなわち資本の有機構成は、技術革新が進むにつれて次第に変っていくのである。つまり資本をより多く、機械や原料や電力に使い、労働にはあまり使わないようになっていくのである。もっとわかり易く具体的な例をあげると、たとえば、ワイシャツをつくる場合300年も昔であればワイシャツの生地と糸などを仕入れるだけで、あとは裁縫師を雇うのに資本を使った。だから資本のうち労働の賃金になる分が大部分を占めたわけである。ところが次第に技術が進むにしたがい、ワイシャツ工場においても、ミシンや電気裁断機やプレス機械やあるいは自動包装機のようなたくさんの機械を買うのに資本を使う。逆に、ワイシャツをつくる労働者は余りたくさん雇わない。そういうわけで労働

者に支払う賃金部分は小さくなっていく。このようにして資本の有機構成が高度化し、資本主義は没落していくであろうと述べている。

(2) 平均利潤率の低下

資本主義没落の過程とは次のようであると説く。

たとえば初めにはCとVとの割合は3対7である。資本を機械などに3、労働力に7使っているとする。ところが技術が進んでCとVの割合が6対4になったとする。そうすると、Vの部分からのみ剰余価値 m つまり利潤が生れるわけであるから m/V =剰余価値率を1と仮定すると、初めの場合は7の利潤が生れるわけである。全体で10の資本を使うと7の利潤が生れてくるわけである。7/10の利潤率になるわけである。ところが後の場合には、 m/v がやはり1で、Vと同じだけの剰余価値が生じたとしてもそれは4だから、結局全体の中で剰余価値が占める率つまり利潤率を取ると4/10ということになってしまうわけである。だから資本の有機構成が高度化すると7/10だったものが4/10になるといったように利潤率はますます下がっていくというわけである。ところで、利潤こそは資本家を駆り立てて生産に励ますものであるが、その利潤が次第に下がっていけば、資本家は生産の意欲を感じなくなる。工場拡張をしよう、会社を大きくしようといったような意欲を感じなくなるわけである。そこで生産は停滞してくる。したがってまた失業もたくさん生ずるようになってくる。あるいは、利潤率が下がるので利潤率を何とか引き上げるために植民地に帝国主義的な侵略を行なう。そういうことをしても結局資本主義が進み、資本の有機構成が高度化する限りにおいて、徐々に労働賃金の支払いにあてる部分Vの割合が小さくなり、その結果利潤が下がる。剰余価値を生む部分Vの割合が小さくなるから、総資本に対して剰余価値の占める割合、つまり利潤率というものは減ってくるわけである。

そのようにして利潤率はますます下がっていく、そうすれば資本家達はますます企業拡張の意欲を減退させ、経済活動は不活発になり、不景気は長引き、恐慌は深刻化する。というのである。これが資本主義を潰す1つの原因である平均利潤率の低下ということである。

(3) 産業予備軍の増大と労働階級の窮乏化

しかしながらもっと重要な、いわばマルクスの革命理論の柱ともいべき点はつぎのようなことである。それは、このVでもって雇うべき労働力のほうは、資本主義の発展するにつれて、放っておいても増えるわけである。自然に人口が増えるから労働者も増えるわけである。

大体、マルクス時代の経済学者は人口が増えることを非常に心配していた。経済学者マルサスは、人口はネズ

ミ算的に増えていく、幾何級数的に増えていく、しかるに食糧は算術級数的にしか増えない。人口は1. 2. 4. 8. 16. というふうに幾何級数的に増えていくけれども、食糧は1. 2. 3. 4. 5. 6. と算術級数的にしか増えていかない。そこで現在のように人口が増える限り人類は貧乏を脱することはできないであろうと述べている。マルクスもまた自然に人口が増えることを心配していたようである。しかし、マルクスはマルサスを批判して、自然に増えることは大して心配はない、資本主義社会においては社会的に労働力人口の過剰が生ずることだと言っている。人口は自然的にも増えていくわけであるが、その上にさらに社会的な人口の増加が加わってくる。すなわち資本主義社会の激しい競争過程においては、次第に大資本が勝ち零細自営者、つまり自分で百姓や商売や鍛冶屋などを行なっているような人々が徐々に没落してしまつて賃金労働者のグループに加わってくる。だから雇われて働らく賃金労働者の人数は自然的に増加するだけでなく社会的にも増加するのである。殊に資本主義が進めば進む程大資本が零細な自営業者を突き落してみんな賃金労働者のグループに入れてしまうのである。それで賃金労働者はますます急激に増加していくであろうと考えたのである。

この増した労働者が全て雇われたならば問題はないのであるが、実は雇われない人数は急激に増加するのに、これを雇うべき資本のほうはあまりふえない。資本の有機構成が高度化するために（つまり、資本の中に占めるVの割合が小さくなるために）資本全体は増えるがVの部分の増え方は極めて緩慢なのである。つまり、CとVの比率が変わらなければ資本が蓄積されるにつれてVの部分もその割合で増えるわけであるが、比率が変わってくるためにVの部分の増加率が非常に低くなるわけである。そこで、その結果、このVの賃金支払い部分をもつても労働者全部を雇うことができなくなってくる。その雇うことができない部分が失業となってあらわれてくるわけである。失業は好景気のときには減少する。不況になると増加する。それは戦争がおきると予備軍ないし在郷軍人は減り、戦争が終ると予備軍、在郷軍人が増加する現象とよく似ているので、マルクスは失業者のことを産業予備軍と呼んだ。

このようにして、資本の有機構成が高度してくると産業予備軍が次第に増えていくのである。産業予備軍は、景気の変動と共に増減しながらも、結局徐々に増加するであろうとマルクスは考えたのである。

失業者がこうして増えてくると、それに付随してもう1つ欠陥が生ずるのである。つまり、失業者の増加と共に賃下げがおこるのである。マルクスの立場からすると労働組合は大した力をもつものではない。資本主義社会

である限り労働組合が多少の力を発揮しても賃金が上がったりする筈はない。せいぜい現在の賃金を維持することができのみであるというのである。また、マルクスの学説を受け継いだレーニンも、労働組合の運動は資本主義社会がある限り大して賃金を上げることはできない。労働組合は、むしろ革命の予行演習場と考えるべきであると述べている。そういうわけで、失業者が増加すれば労働組合が運動をしても賃金は下がる一方で、「労働力の価値」を割ってさえも下がる傾向があるというのである。

こうして、資本主義が進むほど失業は増大し、賃金は下がるわけであるから、労働者の窮乏化はますます進んでいくということになる。資本主義が発展すればするほど労働者は貧しくなっていくのだというこの理論が有名なマルクスの窮乏化理論である。

レーニンによっても、資本主義が発展するにつれて労働者の生活はますます窮乏するであろうというのである。スターリン時代に出たソ連の「経済学教科書」というテキスト・ブックは、レーニンのことばを引用しながら日本の労働者の窮乏化についても触れている。その中で、日本の労働者について次のように書かれている。日本の労働者はますます貧乏になっていきつつあり、病気にかかる率も高まり、その寿命はますます縮まり、彼らは自分の子供を売って、その日を凌いでいると。フルシチョフの時代になってからこの部分を訂正したが、とにかくスターリン時代のテキスト・ブックにはそのように書かれていた。

さて、こうして窮乏化が進むと2つの結果が生じる。第1には革命的エネルギーが労働者の中に蓄積される。つまり、窮乏化が進むと暴動を起して現政府を倒そうという怒りがおこってくる。革命のエネルギーがここに蓄積されてくるのである。それが資本主義を潰す最も重要な原因となるわけである。

第2に窮乏化が進むと、資本家が製品を生産しても売れなくなる。労働者が貧しくて購買力をもっていないのであるから、資本家が製品を生産しても、それを買う者がいないので生産過剰が生じ、ますます不景気が深刻になってくる。すると失業者は更に多く出て、ますます購買力が落ちるという悪循環をくり返し、資本主義はいき詰ってしまうと考えている。

(4) 中間階級の没落と社会階級の両極化の進展

資本主義発展の過程において中産階級は次々に没落する。とくに恐慌がくるたびに中小企業は大量に倒産して、結局は一握りの大資本家とますます貧乏になっていく多数のプロレタリアートとに分裂する。そのように両極化現象があらわれて、2つの階級が激しい対立をするよう

になる。そして、ますます困窮し、しかも数も増えた労働者は怒りを押えきれなくなって革命を起す。その革命によって資本主義社会は葬られて共産主義社会がやってくる。

以上がマルクスの経済学およびそれに結びついたところの資本主義没落論のエッセンスである。

第9章 マルクス主義経済学批判

1. 労働価値説

ところで、このマルクスの理論のどこが間違っているかという点について述べてみよう。

大体マルクスの労働価値説というのは、出発点からして間違っている。さきに、1オッターの小麦 = a ツェントネルの鉄というような数式を書いて、そこから第3の共通物がなければならぬと、マルクスがいつていると説明した。しかし、「交換するということ」と「イコール」ということは同じではない。鉄と小麦を交換するということは、両方がイコールであるということとは別個のことである。鉄を持った人と小麦を持った人が相互に交換しようとさえ思えば、何ら共通物はなくても交換は行なわれる。ところが、マルクスはいきなりイコールという印で鉄と小麦を結んでおいて、そこから第3の共通物が必要であるというようにもってくるのである。だから、この最初の出発点からして誤っているわけである。

また、商品の中には労働によって生産されないものもある。たとえば、土地は売買されるものであり、最近では非常に値段も高いが、しかし労働によって生産されたものではない。土地は昔からあったものである。それでも、価格は持っている。こうした事実は、労働価値説の前提と合わない。また、美空ひばりの喉とか、山本富士子の顔などといものは高い価格をもっているが、労働によって生産されたものではない。彼女達は、非常な歌の練習をしているかも知れないし、山海の珍味もたくさん食べたかも知れないが、それだけではだめである。結局のところ、偶然によって、あのような喉ができ、あのような顔ができたものである。しかし、とにかく非常に高い値段を呼んでいる。このように労働によって生産されたものでない、土地とか、美空ひばりの声とかいうものが商品として売買されている。すべての商品は労働によって生産されたとはいえないのである。それから、第3の共通物を認めるとしても、それは労働によって作られたという属性だけではない。いっさいの商品の生産には土地を必要とする。したがって、土地を使って生産したという性質もすべての商品に共通するのではないかということもいえるわけである。まったく土地を必要としないで生産されるものなどどこにもない。

梅田の地下街を歩いていると周知のように立って切符を売る人がいた。地下鉄の切符を1枚1枚売っている人である。これ程土地のいらぬ商売はないだろうと思うのだが、それにしてもあの人の立っている足の裏だけの土地がなければ、あの商売も成立しないわけである。そうだとすれば、いっさいの商品に共通する性質として、土地を用いて生産したということもいえるわけである。労働価値説のかわりに、土地価値説を主張することもできる。

それからまた、あらゆる商品の生産には資本財を必要とする。今日では、そういう道具とか、機械とかを使わずに生産し得るものはほとんどないのである。道端の靴磨きにしても足をのせる合を持っているし、布もちゃんと持っている。簡単ながら資本を持っている。いっさい資本財——もしくは生産手段——を用いない生産はきわめて稀である。だから第3の共通物として、資本財を用いて生産しているという共通性をあげることもできるわけである。

つぎに使用価値は相互に比較することはできないといっている。たしかにそうである。時計はコチコチと時を刻むし、メリケン粉はパンになって人の腹を満たす。そういうものを比較することはできない。しかし時計が人に与える満足と、アンパンが人に与える満足と、満足度を相互に比較することはできる。人が時計をやるるか、パンをやるるかときかれると、時計の方を欲するのは、時計を貰ったときのうれしさとアンパンを貰ったときのうれしさを心の中で比較するからである。そのような満足度が比較できると、そこからものの値段を説明することもできるのである。マルクス以後に展開された「限界効用理論」とか、あるいは最近の「選択の理論」というのは異なる使用価値のものが人間に与える満足、すなわち効用を基礎にして価格の説明をしているのである。

さらに、労働の異質性の問題がある。商品の価値の本体は、その商品を生産するのに社会的に必要な労働の量だといっても、熟練労働者の労働もあれば、未熟練労働者の労働もある。同じ絵を描く労働でも梅原竜三郎の労働と下手な画家の労働とは違う。マルクスもこれに気づいていた。そして、複雑労働（熟練労働）は何単位かの単純（未熟練労働）に還元し得るといっている。その還元率はというと、それはその労働によって作られた商品の市場価格を見ればわかる。つまり、A労働1時間で作ってものが300円、B労働1時間で作ったものが100円だとすれば、A労働はB労働3つに値することがわかるというのである。しかしこれは循環論である。なぜならば、価格を説明するために労働量というものを探し出してきたのである。ところが、今度はその労働量の間の

問題を価格で説明しようとしているのである。学問的な理論といえないのである。また、複雑労働と単純労働の関係は訓練費に帰着するという説もある。つまり、複雑労働には、労働訓練のために沢山の労働時間がかかっている。その分だけ複雑労働は単純労働より値打があるというのである。しかし、この説明の通用しないことは、先程の美空ひばりの例をみてもわかる。同じ訓練を受けても、よい技術者になる人もあれば、どうしてもなれない人もいるのである。

さらに、同じ労働量を用いて生産しても「生産迂回期間」の違いによって、作られる製品の量が違ってくる。生産迂回というのは難しい理論であるが、簡単に述べると次のようである。同じ量の労働を用いて木を植えても、20年目に切るのと40年目に切るのでは、石数が明らかに異なり価格も異なってくる。労働価値説通りには価格は定まらないのである。

マルクス主義者たちは、好んで資本家の独占ということに口にするが、独占的生産者が競争市場で決まる以上につり上げる場合、この価格は如何に定まるか。これに対して近代経済学では、ジョン・ロビンソン、チュムバレン等の学者が精密な理論を展開したが、マルクス主義者は何ら説明できない。

最後に、資本論第1巻と第3巻の矛盾について述べてみよう。資本論第1巻では、商品の価格は、それを生産するのに社会的に必要な労働時間によって定まると述べている。これが価値法則である。ところが、資本論第3巻では、競争の結果、利潤率は各産業各企業にわたって、均等化すると述べている。そこで、剰余価値率（搾取率） m/V をほぼ一定とし—マルクスもそう考えていたようである—かつ、資本の有機構成が各産業別に異なるとすると、第1巻の立場を貫けば第3巻の主張が通らず、第3巻の立場を貫けば第1巻の立場が成立しない。第4図のように、第1巻の立場だと有機構成の低いA産業が有利である。利潤率5/10である。そこで競争の結果、資

第4図

	$C+V+m=P$	有機的構成	剰余価値率	利潤率
A産業	$5+5+5=15$ 円	$\frac{5}{5}$	$\frac{5}{5}$	$\frac{5}{10}$
B産業	$7+3+3=13$ 円	$\frac{7}{3}$	$\frac{3}{3}$	$\frac{3}{10}$

（剰余価値率は一定で $\frac{1}{2}$ であるとする。）

本がA産業に移動し、A産業の生産は増加し、Aの品物の価格は14円に値下りする。すると、利潤率は4/10。また、B産業からは、資本が流出するので生産が縮小し、

価格は14円に上る。すると、利潤率4/10。こうして利潤率が均等化すると、価格は価値法則から離れるという矛盾がある。マルクスは、在世中資本論第1巻だけ出版し、2巻3巻は草稿ができていたのに出さなかった。ある人は、マルクスがすでにこの矛盾に気づいていたために、2巻3巻を出さなかったのであろうとっている。勿論この矛盾を何とか巧く説明しようという努力は、マルクス主義者によって行なわれているが、未だ成功していない。

このように、このマルクスの労働価値説は多くの欠点があり、もはや今日の経済学では、少なくとも先進国においては見捨てられている。英国の経済学者、政治学者の中にはマルクスにかなり同情的な人がある。経済学者のジョン・ロビンソンや政治学者のハロルド・ラスキなどがそうである。しかし、そういう人さえも、マルクスの労働価値説だけは中世の遺物であって認めることはできないと、断言しているのである。

2. 剰余価値説

剰余価値説も、労働価値説を批判すると崩れてしまうわけである。しかし、一歩後退して、労働価値説を認めるとしても剰余価値の成立には問題がある。資本家同志が激しく競争しているとすれば、剰余価値に相応する部分を削除してでも値下げをして、他の資本家の市場に進出しようとする。この値下げ競争は、剰余価値が0になるところまで行なわれるはずである。ところがそれを引止めて0にさせないものは何であるのかについてマルクスは説明をしていない。また、シュムペーターも指摘しているように、剰余価値が存在する限り、資本家は事業を拡張しようとする。だから、終には、土地とか労働力が不足するようになるはずである。そうすると、それらのものが値上りする。労働力不足で賃金が上げられるのに「上げてもらっては、マルクスの価値法則にそむくから困る」という労働者はいない。こうして労働力や生産手段の値上げが行なわれると、それは下から剰余価値部分を削除していく。剰余価値は、この面からも0にずなるはである。しかるに、0にならないのは何故か。マルクスは、これについても十分な説明をしていない。

3. 資本主義没落論

それから資本主義没落論については、次のような批判が行なえるわけである。なるほど資本主義が発展すると、ますます機械を多く用いて、労働力をあまり用いないようになる傾向がある。つまり、資本の技術的構成は高度化するが、それが直ちに資本の有機的構成を高度化させるとは必ずしもいいきれないのである。ということは、いかに鉄を多く用いるようになって、あるいは、電気を用いるようになって、鉄や電気の値段が下がってく

ると金額としてはあまり多く支出しないということになってくる。だから、鉄や石炭を多く用いるようになったということは、直ちに資本の有機的構成が高度化するということを意味しないのではないかという批判ができるわけである。

これと関係して、失業がますます増え、窮乏化が進んだかという問題がとくに重要である。すでに述べたように、労働力が増えていくのに、Vの部分があまり増えないので失業者が出るというのである。ところで初めにはCとVの割合は3対7であったのが、技術の進歩の結果CとVの割合は6対4になるというふうにVの割合が減っていくとしても、Vの絶対額は増えていく。というのは、初めには1億円の資本があったのが、次第に資本が蓄積されて2億円の資本になる。そうすると、初めにはVの部分が7000万円(1億×0.7)、後では8000万円(2億×0.4)になる。だから、絶対額が増えていくわけである。このようにして、全体に対する割合としては減少しながらも、絶対額ではVは増えていくのである。このことは、マルクスも認めている。

したがって、失業が起きるのはどういう場合かという、割合としては減少しながらも、絶対額の増えていくVの部分が雇い得るよりも、人口の自然増加および社会的労働人口の増加による労働力の増加のほうが急速である場合である。もう一度述べると、相対的には減少しながらも、絶対的には増えていくVの部分が雇い得るよりも、それ以上に労働力が急速に増えていく場合には、産業予備軍が多く出るに違いないわけである。しかしながら、そのことは果して理論的に証明できるであろうか。マルクスは、Vが雇い得るよりもなお一層、労働力の増え方が急速であるということを理論的に証明していない。マルクスのあらゆる文献のどこにもその理論的な証明は行なわれていない。マルクスは、ただ当時の自分の周囲の情勢からして、次第に機械を多く使うようになったら、失業者が出るに違いないという直観的な憶測をしたに過ぎないのである。勘による予言をしたに過ぎないのであって、その理論的な証明はどこにも行なっていないわけである。現実はこの予言があてはまっているかというところを決してそうはなっていない。[マルクスの生きていた150年前から現在までの歴史の発展をふりかえてみると、急激に技術革新は進んでいる。機械を大量に使うようになってきている。しかし、その割合で失業者が増大しているかというところを決してそうではない。失業者は増減しているが増大する一方であったとはいえない。マルクスのときは、1割あった失業者が今日では4割になったというような一方的な増え方は決してしてはいないのであって、マルクスの予言はその点においてあてはまっていな

いわけである。もっと身近かなところで、戦後、経済成長が非常に急速に進んで、技術革新も大に行なわれたドイツや日本を例にとって考えてみよう。技術革新が急に進んだドイツにおいて、膨大な失業者が出ているだろうか。決してそうではない。まったくマルクスの予言とは逆に、深刻な労働力不足があらわれている。産業予備軍どころか、全く反対の労働力不足という事態が生じてきている。だから、ドイツではイタリア、スペインより労働者をつれてきて雇っている。ところがまた、少しドイツより遅れて出発したイタリアが、ここ数年間に非常に技術革新が進み、経済も急速に成長した。するとこんどは、そのイタリアが——イタリアでは10年ほど前までは、ドイツに比べると200万人程余った労働者がいたのであるが——そのイタリアが、[200万の余った労働者を吸収しつつして、労働力不足になってきたのである。

そこで、イタリアはアメリカやドイツの新聞に広告を出して、イタリアの労働者よ祖国へ帰れ、祖国では仕事が諸君を待っている、と宣伝した。このような広告を出さざるを得なくなったわけである。マルクスの予言とは、まったく正反対の、技術革新が進むところにおいて労働力不足が深刻になるという事態があらわれてきたわけである。日本においては、ドイツ以上の経済成長を続けて、技術革新は我々も承知のように非常な勢いで進んでいる。われわれ周辺の家庭用品でも、時計にしるカメラにしるステレオにしる、とに角、刻々と技術革新が進んでいる。生産技術の面においてもそうである。ホット・ストリップ・ミルのようなすばらしい機械が次々に入ってきた。そのように生産面における技術革新が進んでいるから日本においては膨大な失業者を生じているだろうか。否である。それとはまったく逆の深刻なる労働力不足が生じている。そば屋の出前持ちがなくなったり、あるいはクリーニング屋が手不足になってくるというような現象が、われわれの周辺に影響を及ぼしてきている。こういうわけで、現実をみても、マルクスの予言はあてはまっていないわけである。この点についてもう少し詳しく述べよう。例えば、1つの繊維会社に新機械が導入され、技術革新が行われると、そこに失業者が出るかもしれない。しかし、その反面、新機械をつくる会社が膨脹するはずである。そのため、その機械会社に雇員が増えるはずである。一方における雇員の減少を、他方における雇員の場合加がつぐなうようになるのである。この理論を補償説という。また、新しい技術が発見されると、これまで投資されなかった資本が投資されて、そのため労働に対する需要もふえるということもあり得る。これは、シュムペーターという学者が早くから強調しているところである。その上、労働力人口の増加の仕方は鈍ってくるし、

就学年令の上昇や労働時間短縮のため、人口がふえるほどには供給労働量は増加しない。こうして、理論的実証的に考えても、マルクスの学説は間違っている。

したがって、資本主義が発展するにつれて、窮乏化が次第に進んで労働者は一層貧しくなっているかというとは決してそうではない。マルクスの原則が正しいのであれば、資本主義が最も発展したアメリカにおいてこそ労働者の生活は最も低いはずである。がしかし、そうではなく、アメリカの労働者の生活水準は世界でも最も高いわけである。それからまた、日本においても賃金はますます下がっているかというとは決して下がっているとはいえない。それぞれ自分の賃金に不満を持っていかもしれないが、そういう不満、つまり金欠感というものはある。しかし、金が足りないという主観的感じ、つまり金欠感と生活水準が下がってますます窮乏化しているということとを混同してはならない。金欠感は新しい品物がつぎつぎ現われてくるかぎり、いつまでも続く。こんどは電気冷蔵庫が欲しい、つぎは小型の自動車が欲しいと思っていれば、いくらでもお金が欲しくて足りないことになる。慢性的に金は足りない。カメラのスタイルも全然違ってきている。この間まで露出計が入っていなかった。ところが、新型にはセレン式露出計が入る、そのつぎは露出計でもCdSメーターが入る、というようなことで次々と変わってくるから、次々と新しいものが欲しくなる。したがって、金欠感というものとは、はっきりきり離して考えなければならないものである。生活水準が段々と下がってきているかというとは、そうではなく徐々ながらも上ってきている。われわれが、団体交渉をしたり、親類に無心をいったりする場合には、賃金が下がっているというほうが有利かもしれないが、科学的に、客観的に見る場合には、賃金は少しづつながら上がっているのを認めなくてはならない。戦前の労働者や農家の子供達がどのような暮しをしていたかということを想い出すだけでも賃金が少しづつ上がってきたということは明瞭にわかる。マルクスの予言はあてはまっていないのである。

また、中間階級没落論については、一部の古い中産階級、つまり自営業者は減少しているが、それに変わって新しい中産階級が育ってきた。ホワイトカラーといわれる新しい中産階級が育ってくると同時に現場の肉体的労働者なども一流企業の労働者あたりを先頭にして、中間階級化してきたわけである。先進国になればなるほど、労働者の中のますます多くが中間階級化してきて非常に厚い中間層ができてきているが、日本も追々そうなっているわけである。そのようになってきて、ここでもやはりマルクスの予言とは異った事態が現われるのである。

資本主義それ自身もマルクスの生きていた19世紀の資本主義と今日の資本主義とは非常に変わってきている。まず、労働組合が活発な活動を行って労働者の生活条件を上げている。他方、企業も資本家の私的機関ではなくなった。マルクスの考えたような資本家ではなく、従業員の中から昇進した経営者が企業を管理するようになった。株式は分散し、多くの民衆が株主、つまり資本家になった。労働者も株を持つようになり、わずかなが「資本家」の資格をおびはじめた。普通選挙権の実施などに

よって、国家もマルクスの述べた如く資本家の搾取機関ではなくなった。今日では、国家は労働者のための政策を行い、所得の再分配や社会保障を進めつつある。もちろん、決して満足すべき状態ではなく、われわれは更にそうした国家の社会政策を押し進めなくてはならない。しかし、いずれにしても、あらゆる点からみて、マルクスの予言はあたっていないし、その理論も間違っているのである。
(以下次号)

ならば、企業との協同は学問の性格上否定しえないといわざるをえないのであるが、そのことは、現在行なわれているような産業協同がすべて是認されることを意味するものではないし、またパーリッツが指摘しているような権力につかえる人びとになる危険性を無視するものでもない。ここでも中心となるのは、科学としての経営学を志向するならば、みずからの研究態度を確固たるものにし、単なる管理技法の発展者にならない覚悟をすることであろう。あるいは経営学を管理技法の集積であるとするならば、それを経営者のみに役立つものにせず、労働者をも含めたより広い視野のもとで開発するように努めることが、少なくとも一歩前進を意味することになる

う。

4) 結局のところ、研究者自身の問題にすべてが帰するように思われる。パーリッツもそのことを示唆していた。その個所でもコメントしたところであるが、このことを、抽象的に言葉の上だけで問題にするのではなく、具体的な処置方法にまで言及しなければ、本質的な解決にならないことはいうまでもない。しかもそのことは決して容易なことではない。私自身もこの段階で具体案を提示することはできない。ただここで試みたことは、パーリッツの著書の内容を紹介することによって、産学協同についての思考素材を提示しようとしたにすぎないのである。